

雲仙岳の火山活動解説資料（平成 29 年 9 月）

福岡管区气象台
地域火山監視・警報センター

火山活動に特段の変化はありませんが、長期的には 2010 年頃から普賢岳から平成新山直下の深さ¹⁾ 1 ~ 2 km を震源とする火山性地震が時々発生していますので、今後の火山活動の推移に留意してください。

噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

活動概況

- ・噴気など表面現象の状況（図 1、図 2 - ）

平成新山で噴気は観測されませんでした（8 月：なし）。

- ・地震や微動の発生状況（図 2 - 、図 3）

火山性地震の月回数は 16 回（8 月：21 回）と、少ない状態で経過しました。このうち震源が求まった火山性地震は 11 個で、普賢岳から平成新山直下の深さ 1 ~ 2 km に分布しました。長期的には 2010 年頃から普賢岳から平成新山直下の深さ 1 ~ 2 km を震源とする火山性地震が時々発生しています。

火山性微動は 2006 年 11 月以降、観測されていません。

- ・地殻変動の状況（図 4、図 5）

GNSS²⁾ 連続観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められていません。



図 1 雲仙岳 平成新山の状況（9 月 29 日、野岳監視カメラによる）

1) 海拔 0 m からの深さを示す。

2) GNSS (Global Navigation Satellite Systems) とは、GPSをはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称です。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ (<http://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>) や気象庁ホームページ (<http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/volcano.html>) でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（平成 29 年 10 月分）は平成 29 年 11 月 9 日に発表する予定です。この資料は気象庁のほか、国土地理院、九州地方整備局雲仙復興事務所（長崎県経由）、九州大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』を使用しています（承認番号：平 26 情使、第 578 号）。

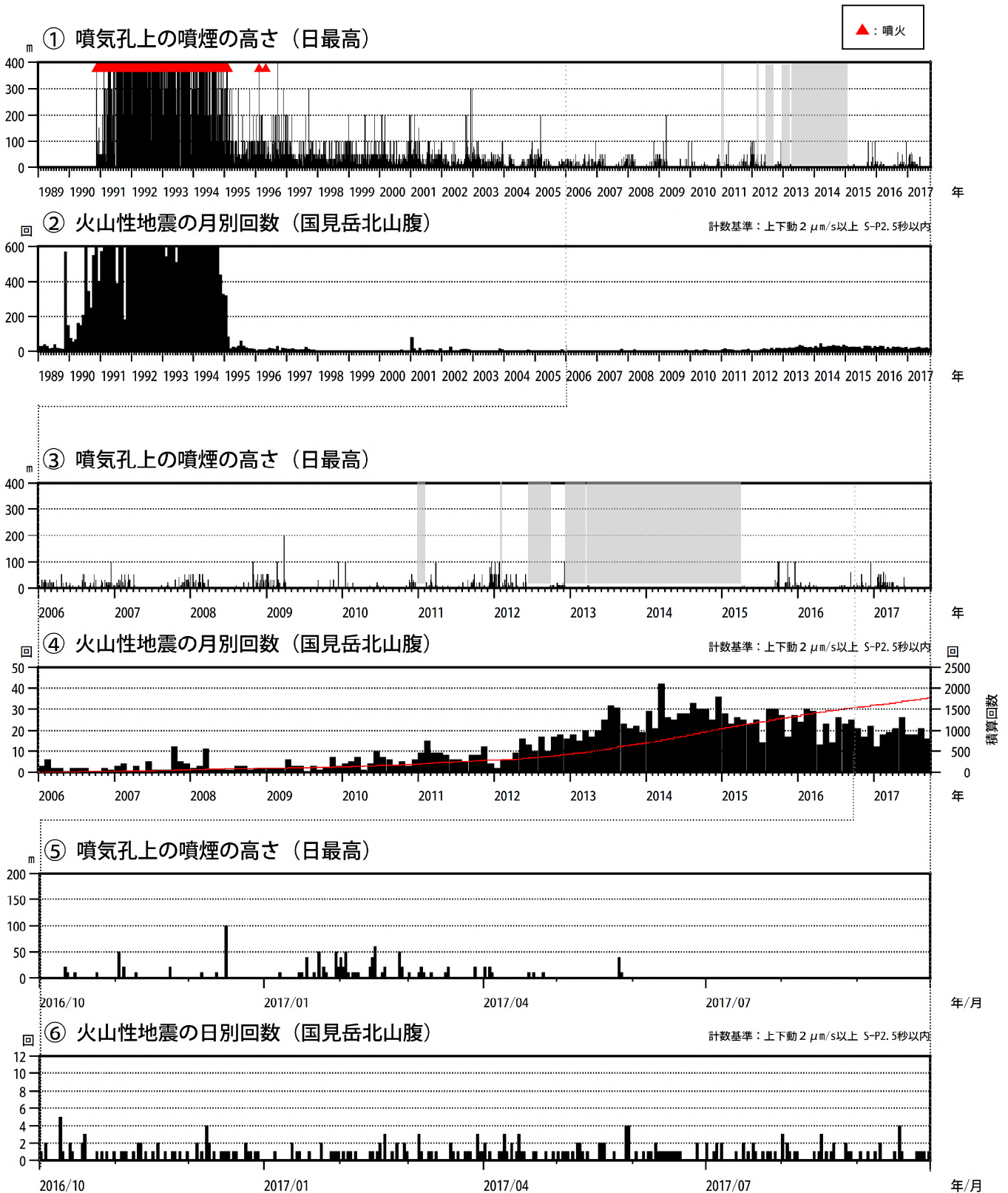


図2 雲仙岳 火山活動経過図（1989年1月～2017年9月）

< 9月の状況 >

- ・平成新山で噴気は観測されませんでした（8月：なし）。
- ・火山性地震の月回数は16回（8月：21回）と、少ない状態で経過しました。
- ・長期的には、2010年頃から普賢岳から平成新山直下の深さ1～2kmを震源とする火山性地震の活動がやや活発となっています。

火山性地震の回数については、2012年8月31日までは矢岳南西山腹の計数基準（上下動 $5 \mu\text{m/s}$ 以上）で計数しています。

灰色部分は監視カメラ障害のため欠測を示しています。

の赤線は地震回数の積算を示しています。

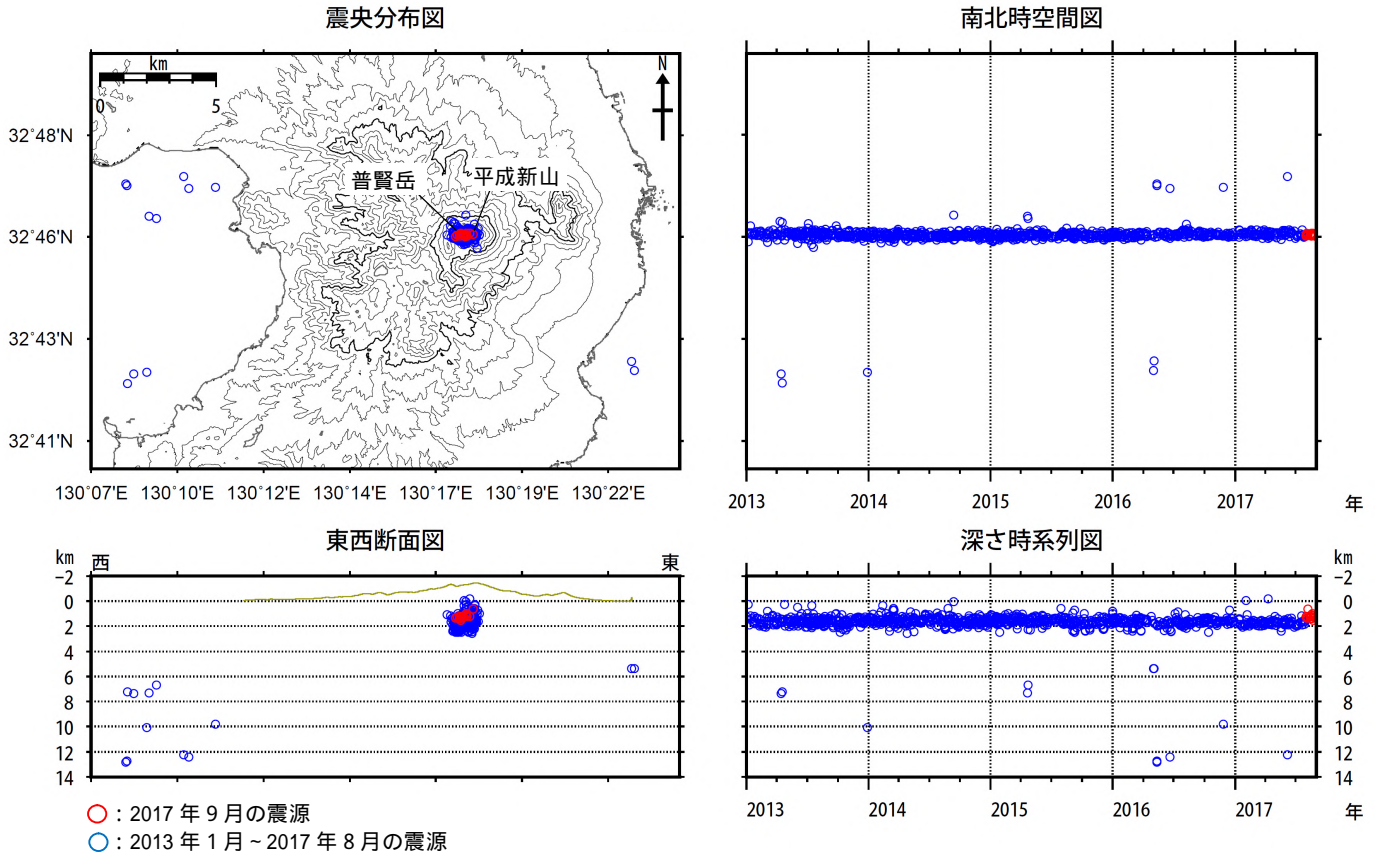


図 3 雲仙岳 震源分布図（2013 年 1 月～2017 年 9 月）

< 9 月の状況 >

震源は、普賢岳から平成新山付近直下の深さ 1 ~ 2 km に分布しました。（東西断面図）

2017 年 8 月 1 日から震源決定方法を変更しています。

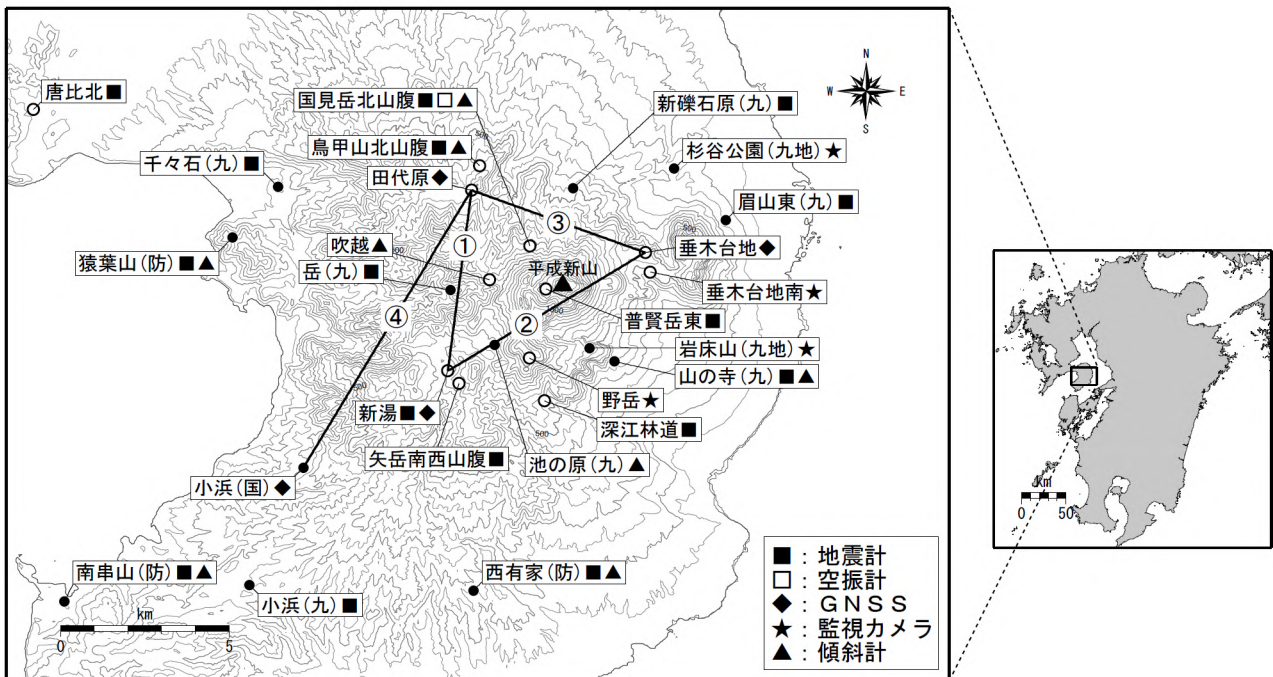


図 4 雲仙岳 観測点配置図

小さな白丸 () は気象庁、小さな黒丸 () は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国): 国土地理院、(九地): 九州地方整備局、(九): 九州大学、(防): 防災科学技術研究所

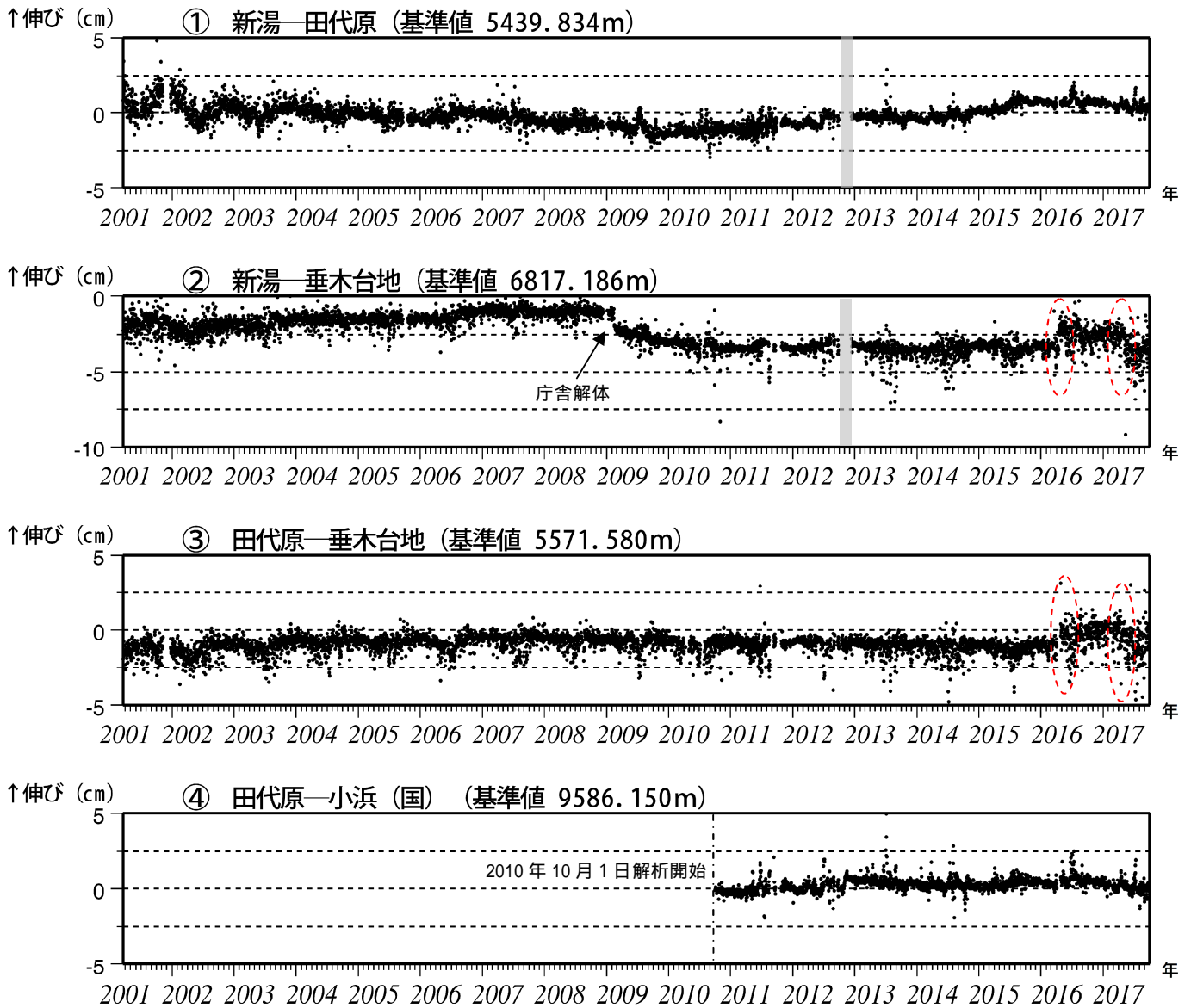


図5 雲仙岳 GNSS連続観測による基線長変化(2001年3月~2017年9月)

GNSS連続観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められていません。

この基線は図4の ~ に対応しています。

の基線にみられる2009年2月の変化は、雲仙岳観測所の庁舎解体に伴う変動と考えられます。

2010年10月以降のデータについては、電離層の影響を補正する等、解析方法を改良しています。

灰色部分は機器障害のため欠測を示しています。

図中の赤破線は「平成28年(2016年)熊本地震」の影響と考えられます。

(国)：国土地理院